

衆院は今すぐ解散し、総選挙をやるべきだと考えています。理由は、「定額給付金が『振興券の二の舞い』になる」とか「今の衆院は郵政民営化の是非で国民に選ばれたにも係わらず、国民の反対の多い定額給付金について、直近の民意である参院の議決を尊重せず、衆院の議決を優先することで『4年前の民意を頼りのごり押し』している」というものではありません。

また、「総務大臣が『日本郵政のかんぽの宿70施設のオリックスグループへの一括譲渡』に反対した結果、譲渡問題は白紙に戻された」とか「官僚OBの特権の象徴である天下りの繰り返しである『渡り』を自民党幹事長の質問に対し、総理が自分は許可しない」としたことを評価しないということでもありません。

はたまた、林芙美子のエッセイ「生活」の行にある「……政治欄はめったに読まない。だから私は、小学生よりも政治の事を知らない。いつだったかも、日日新聞から、議会と云うものを観(み)せて貰った。入口では人の懐(ふところ)へまで手を入れて調べる人がいたり、場内へ這入(はい)ると、四囲(あたり)の空気が臭くて、じっとしていらなかった。真下に視下(みおろ)す議場では、居眠(いねむ)りをしている人や、肩を怖(い)からせてつかみあっている人たちがいた。それが議員と云う人たちなようで、もう吃驚(びっくり)してしまって、それきりな気持ちになってしまっている。」とか「……感じのいいお役人であったが、年収四千元は困ったことだと思った。純文学をやっているひとつ、案外、派手のようにだけれど貧乏で、月五拾円あるひとは、新進作家の方でしょうと云うと、そうですかねえと感心していた。」のように、国会議員や役人に対する批判からでもありません。

林芙美子の書いているような国会議員の姿は、今も昔も変わりなく、幾ら総選挙を経ても増えることはあっても減ることのない、国会議員の習性です。この習性は、国会議員の定数削減をし、本当に政治に熱意を持っている人だけが国会議員になるシステムにならないければ、不可能なことです。また、どのように国民が貧困に喘いでいても、自分自身の生活は保障されているのが役人(官僚)で、民間のように人員削減(解雇)は簡単にはできません。総選挙で政権交代があっても一朝一夕には解決できない、問題だと思います。

勿論、一所懸命生活のために働いている人々が突然解雇され、路頭に迷う今の社会では、国会で居眠りをしている議員などは、突然解雇され路頭に迷うべき人種であると思いますし、官庁システムの無駄を省くことは、増税の前にやるべきことではありますが。

しかし、理由はそういうことではありません。政府与党は、まず経済対策を行ってからでない解散総選挙は行わないと言いながら、その実、選挙対策のためにバラマキ(定額給付金)と、消費税増税のうやむや化を図っています。野党は野党で、給付金財源を削った補正予算修正案を参院に提出しましたが、どうせ衆院で否決されるに決まっており、此

方も選挙対策でないとは言い切れません。

もう、今の国会は、与野党の議員にとって、国民生活や経済対策は二次、解散総選挙に浮き足立って、マトモに国民のことを考える隙がないような状況です。

それ故、早期に解散総選挙を行い、国民の審判を受ければ、与野党が落ち着いて、少なくとも政策を考えられる国会環境になるのではないのでしょうか。悲しいことですが、日本の将来は全てそれからだと思います。



< 林芙美子 (1903-1951) >

本名：フミ子、「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」の名句で知られる昭和初期の流行作家。

北九州市門司区生まれ。尾道市立高等女学校（現広島県立尾道東高等学校）卒業。



高女時代、学費を得るため夜は帆布工場で働き、夏は神戸に出稼ぎに行くなど、苦学をしながら文学の道を志すようになり、「秋沼陽子」名で『山陽日日新聞』や『備後時事新報』に投稿。

高女を卒業後、『放浪記』のモデルとなる岡野軍一を頼って上京。1928年から長谷川時雨主催の雑誌『女人芸術』に私小説『放浪記』を連載し、1930年に単行本として出版され当時のベストセラーとなった。戦時中は報道班員となり、中国や仏印に従軍。戦後も多くの小説・随筆を発表し、『晚菊』で女流文学者賞を受賞。

他に、『蒼馬を見たり』『風琴と魚の町』『清貧の書』『泣蟲小僧』『牡蠣』『稻妻』『うず潮』『浮雲』など。

## 春秋：「振興券の二の舞い」(1/30)

欲しいと言った覚えもないのに、お金を寄越すという。じゃあ頂こうと思ったら「あなた、お金持ちじゃないでしょうね？ 裕福なのに、もらおうなんてサモシイ」ときた。さすがに「サモシイ」は取り消されたが定額給付金は、やはり訳の分からないカネだ。

補正予算が成立して3月中旬にも配り始める見通しになった総額2兆円がどう使われるか、本紙の調査が昨日の朝刊に載っていた。首相の「盛大に使ってくれ」の呼び掛けどおり「不要不急の消費をする」人は3割しかいない。「とっておく」と「生活の足しに」が合わせて56%だった。

思い出すのは10年前、地域振興券なる期限つき商品券を子供、お年寄りがいる家庭に渡した消費刺激策のことだ。振興券専用の売り出しを仕掛けた店も多く、また券を現金に換えられない決まりにしたので、盛大に使うはず。そんな政府のもくろみは外れ、約6200億円のうち7割近くが貯蓄にってしまった。

今度の調査で12%ある「わからない」が全部「不要不急」に回るはずはなく、消費喚起策としては振興券の二の舞いになりそうだ。石油や食料品の急な値上がりに対抗する生活支援金だったのを、経済情勢激変の中で「消費を呼ぶ」に趣旨をかえ、それがまた看板倒れとは。このカネは、やはり訳が分からない。

### <地域振興券>

小淵内閣のもと、1999年4月1日から9月30日まで日本国内で流通した商品券で、当初の案ではふるさとクーポン券（ふるさとクーポンけん）と仮称され、当初の案では全国民に1人3万円分、総額約4兆円の商品券を交付するというものであった。

しかし、最終的には、対象は15歳以下の子どもを持つ世帯主と高齢者3500万人に、財源を国が全額補助することで、日本全国の市区町村が発行し、1人2万円分（額面1,000円の地域振興券を1人20枚ずつ）、総額6,194億円を贈与という形で交付された。

原則として発行元の市区町村内のみで使用でき、釣り銭を出すことが禁止され、額面以上の買い物をするのを推奨した。

もともと商品券配布構想は98年春頃から一部でいわれ、公明党は夏の参議院選挙で「一人当たり3万円の商品券配布」を公約していた。

結局、地域振興券は、交付世帯の多くが生活必需品の購入を現金の代わりに振興券でおこなったにすぎず、当初から指摘されたように交付金額の多くが貯蓄に回されたこと、景気対策として失敗だったと言われている。



天声人語：「4年前の民意を頼りのごり押し」(1/28)

荘子の「無用の用」は、役に立ちそうもない物事が実は有益という教えだ。「遅々として進む」移行期の政治は、この言葉を唱えながら追いかけてたい。もめる国会にも、各党の真剣さを吟味できる「用」がある。

与党が押さえる衆議院と、野党が握る参議院がまた衝突した。きのう成立した第2次補正予算には、悪評の定額給付金のほか、高速道料金の引き下げ、妊婦健診の無料化など玉石が交じる。参院は「2兆円の石」である給付金を除いた修正案を可決し、衆参の議決が分かれた。

両院協議会の議長をくじ引きで取った野党は、徹底協議を求めて両院協を引き延ばす策に出た。これで補正予算の成立が1日遅れ、麻生首相の施政方針演説も本日に持ち越された。

給付金の怪しさ、筋の悪さは国民が見抜く通りである。郵政選挙の、つまりは4年前の民意を頼りに、これをごり押しする与党にはあきれられる。とはいえ、自民党にさらなる造反が出る兆しはなく、野党の攻め手も限られてきた。くじで稼いだ1日は世論を意識したものだろう。

世界的な経済危機の中、米国は新大統領で再生へと踏み出したのに……とは嘆くまい。これも政治決戦のコスト、陣痛のようなものだ。各党の振る舞いは、総選挙で一票を投じるよすがにもなる。しかと見届けたい。

それでも両院は政策を決めるためにある。決戦の年とはいえ、与野党は妥協点を探る器量も見せてほしい。国民生活ほったらかしで政争に明け暮れるだけの国会なら、荘子もかばいようがない無用の長物だ。醜院、惨院である。

< 荘子 (BC369- BC286) >

戦国時代の宋国（現在の中国河南省）に産まれた思想家で、道教の始祖の一人とされる人物である。荘周（姓＝荘、名＝周）。字は子休。

若いころ蒙（現在の安徽省蒙城県）の漆園の役人を勤めたほかは無位無冠であったようで、その他の伝記的事実についてはほとんど分っていない。

従来は、老子の教えを学び、道家思想を発展させた人物とされてきたが、関係がはっきりしないが、その思想を表す代表的な説話として胡蝶の夢がある。

「荘周が夢を見て蝶になり、蝶として大いに楽しんだ所、夢が覚める。果たして荘周が夢を見て蝶になったのか、あるいは蝶が夢を見て荘周になっているのか。」

この説話の中に、無為自然、一切斉同の荘子の考え方がよく現れている。

紀元前370年から319年に生き名家とされる思想家恵施、墨家の論理学や平和主義を唱えた宋榮子などと交流があったことは著作「荘子」の中に出てくる。



### 編集手帳：「経営者の人品」(1/31)

経営者ならば誰しも、表通りに店舗を構えたいものだが、東京都民銀行の頭取を務めた故・工藤昭四郎氏は新しく支店を設けると、例えば裏通りの「一步下がった所」を選んだという。

銀行の支店は午後3時を過ぎるとシャッターをおろし、残金照合などの仕事に入る。商店街がこれから活況を迎える時刻に、シャッターのおりたその部分だけ空気が冷える。周囲に迷惑をかけないように一步下がるのだ、と。

経済人で作家の辻井喬（堤清二）さんが本紙に連載した回顧録で工藤氏の言葉に触れていた。目を宙の高みに据えられるかどうかで、自分の会社と周囲の空気を俯瞰（ふかん）できるかどうかで、経営者の人品は知れるのだろう。

破綻（はたん）寸前で納税者から公的資金の援助を受けた米国の金融機関経営者が巨額の賞与を受け取っていたことに、オバマ大統領が「恥ずべきだ」と怒りをあらわにしたという。昨年1年間の総額1兆6000億円、納税者の心は冷えたに違いない。

その字のあるなしで「聡」明を語り継がれもし、「恥」を知れと叱（しか）られもする。経営者が胸に刻むべきは俯瞰の目 「公」の一字だろう。

#### < 工藤昭四郎 (1894-1977) >

実業家。東京都民銀行頭取、経済同友会代表幹事などを務めた。徳島県徳島市に生まれ。東京帝国大学法学部卒。

卒業後、日本興業銀行に入行、終戦時は大阪支店長。1945年大蔵省物価部長に転じ、預金封鎖、財産税徴収、国家補償の全面打ち切り、米の強制供出、隠退蔵物資の強制買い上げ、失業対策など一連の非常措置の実施を主となって行う。

1950年復興金融公庫理事長、次いで、東京都民銀行頭取、経済同友会代表幹事、東北電力株式会社取締役、日本経営者団体連盟常任理事、公正取引協会会長、東京商工会議所監事、通商産業省百貨店審議会会長、石炭鉱業合理化事業団理事長などの各種役員、委員を歴任。

#### < 辻井喬 (1927-) >

詩人・作家、本名堤清二。父は西武グループの創業者堤康次郎。

実業家。経済学博士（中央大）。セゾングループ（旧・西武流通グループ）の実質的オーナー。東京大学経済学部卒。



世間一般では経営者・堤清二としての知名度が高く、資産家の道楽としての文芸活動＝辻井喬と誤解されることが多い。

財団法人セゾン文化財団理事長。日本ペンクラブ常務理事。日本文藝家協会常務理事。「歷程」同人。日中文化交流協会会長など。

作品に、『彷徨の季節の中で』『父の肖像』『消費社会批判』など。

### 余禄：「渡りの今昔」(1/31)

江戸時代も後期には名の知れた旗本でも武士や中間（ちゅうげん）を臨時に雇うことが多かった。財政難でとても正規に抱えきれなくなったのだ。この臨時雇いの家来を「渡り徒士（かち）」「渡り中間」という。口入れ屋もあったというから、派遣家来といってもよさそうだ。

「南総里見八犬伝」の作者、滝沢馬琴は若いころ兄2人とともに渡り徒士としての暮らしを送った。実家が父の死とともに困窮し、兄弟は年2両から6両のわずかな俸給で主家を転々とする。馬琴も4年余りの間に4度主家を変えたという。

長兄は死に瀕（ひん）した母の看病を主君に許されず職禄（しょくろく）を失う。次兄は宿直番が重なり体を壊す。次兄が長屋で一人息を引き取った際、宿直明けにかけつけた馬琴は「見るにつけ思うにつけ遺憾ならずということなし」と渡り徒士の身の上を嘆いた（林美一著「時代風俗考証事典」）。

だが時代が変われば言葉も変わる。今や「渡り」は天下りを繰り返してきた官僚OBの特権の象徴だ。その渡りのあっせんを例外的に認める政令をめぐって批判を浴びていた麻生太郎首相がようやく「あっせん申請は認めない」と明言した。もっとも政令はなぜか撤回していない。

高額退職金を何度ももらう「渡り」があるからといって、馬琴と同じような嘆きがこの世から消えたわけではない。それどころか派遣など非正規雇用労働者の失職者は3月末までに約12万人を超えることが判明した。次の職に渡ろうにも失業率が過去最大の悪化幅を示す今日だ。

非正規雇用も、その立場の弱さも、上下の境遇の隔たりも、実は江戸時代とさして変わりないではないか。そう言いたくもなる「渡り」の今昔だ。

< 滝沢馬琴(1767-1848) >

江戸時代後期の読本作者。筆名の曲亭馬琴。江戸深川生まれ。

24歳の時彼は名戯作家・山東京伝の門をたたき、歌麿や写楽を発掘したことで有名な版元・蔦谷重三郎と出会う。

二人の勧めで黄表紙を書き始め、生涯の代表作となる「南総里見八犬伝」は文化11年(1814)に始まり天保13年(1842)まで28年がかりで書き続ける。



「南総里見八犬伝」は全180回、98巻106冊の大長編小説で、最後の方を書いていた頃はもう馬琴は老齢のため目が見えなくなり、息子の宗伯の妻、お路に口述筆記をさせて書き続けたと伝えられている。

作品として『新累解脱物語』『椿説弓張月』『三七全伝南柯夢』『俊寛僧都夢物語』『南総里見八犬伝』『朝夷巡島記』『傾城水滸伝』『近世説美少年録』『開巻驚奇侠客伝』『風俗金魚伝』など多数。

< 林美一（1922-1999） >

浮世絵研究家、時代考証家。大阪府大阪市生まれ。

大映京都撮影所勤務を経て、江戸文芸、特に浮世絵の研究を始める。映画、テレビなどの時代考証も行う。

日本のアカデミズムでは扱われない浮世絵、特に春本（艶本・春画）について多くの編纂、紹介の書を著す。

在野の研究者ながら、考証は確かで、後発の学者たちは大きな恩恵をこうむっているが、未だ正当に評価されているとは言いがたい。

著書に『かわらけお伝考』『東海道艶本考』『艶本紀行東海道五十三次』『艶本江戸文学史』『珍版・稀版・瓦版』『江戸の二十四時間』など多数。



江戸名所図会 新吉原仲之町 八朝の図(江戸の二十四時間参照)